

地域居住福祉施設群「輪島 KABULET」の開設 3 年後の「社会化」 —西川英治「ごちゃまぜ」設計論の検証—

“Socialization” Three Years after the Opening of the Wajima KABULET,
a Group of Community Residential Welfare Facilities
- Verification of Eiji Nishikawa's "Gochamaze" design theory -

○笠川睦^{*1}, 山崎寿一^{*2}, 山口秀文^{*2}

KASAKAWA Mutsumi, YAMAZAKI Juichi, YAMAGUCHI Hidefumi

This paper will focus on the Wajima Caboule, a group of community residential welfare facilities built in the central city of Wajima, Ishikawa Prefecture. Three years after its opening, the actual situation and logic of "socialization" in the community will be clarified by examining the "jumble" design theory of Eiji Nishikawa, the designer of the facilities. The relationships among users, operators, and communities are built and socialized through the actual daily use and interaction based on a variety of subjects, spaces, and functions, and the sharing of goods, spaces, events, and human resources.

キーワード：居住福祉, ごちゃまぜ, 設計論, 社会化

Keywords: Residential Welfare, Gochamaze, Design theory, Socialization

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

近年、少子高齢化や担い手不足が深刻化する状況において、地域の誰もが参加し、主体的に支え合う共生社会の実現が求められている。¹⁾ そうした中、様々な課題を抱える石川県輪島市の中心市街地において、障がい者の生活支援を始めとした共生社会の実現による地域課題の解決と活性化を目的としたプロジェクトとして 2018 年からスタートしたのが、社会福祉法人佛子園と青年海外協力隊の OBOG で構成された JOCA（以下 JOCA）による共同プロジェクト「輪島 KABULET」である。

本研究では、上記の地域居住福祉施設群である「輪島カブーレ」を対象に、その開設 3 年後の地域における「社会化」の実態とその論理を、施設の設計者である西川英治の「ごちゃまぜ」設計論を検証しつつ明らかにすることを目的とし、以下 2 点の調査分析を行なって研究を進める。

①2020 年における利用・交流事例と施設運営・建築設計

の特徴との関わり

②開所から 3 年間で行われてきた日常的な施設利用以外の関係性構築への取り組み

複合型福祉施設の利用・交流事例に着目した研究^{2) 3)} はこれまでも行われて来たが、施設と地域間での関係性構築については記述されておらず、また輪島 KABULET の先行研究⁴⁾ と比較しても、開所から 3 年後の 2020 年における利用・交流の全体像と施設運営・建築設計の特徴との関係について分析した点において、本研究に新規性があると考えられる。

1.2 調査概要

本研究では、施設運営者である輪島 KABULET 職員と施設サービス利用者、さらに設計者である五井建築研究所（以下五井）社長の西川英治氏と職員へのヒアリング調査に加え、2020 年 10 月～12 月での複数回での現地観察調査を行った。まずは現地観察調査から、輪島 KABULET におけるサービス利用者や職員の利用・交流事例を把握する。その後、それらの観察調査を行う上で特徴的であ

*1 西日本旅客鉄道(株)

*2 神戸大学大学院工学研究科、教授、博士（工学）

*3 神戸大学大学院工学研究科、助教、博士（工学）

West Japan Railway Company

Professor, Graduate School of Eng., Kobe University, Dr. Eng.

Assistant Professor, Graduate School of Eng., Kobe University, Dr. Eng.

表 1：調査概要

調査方法	調査対象	調査時期	調査活動内容
ヒアリング調査 (現地と オンライン 両方実施)	輪島KABULET職員 (JOCA2人・佛子園2人 ・パート2名)	10/3~7 12/8~14	輪島KABULETの職員数・福祉 サービス登録者数・各福祉 サービスの一日のプログラム これまでのイベント開催履歴 施設内でのシェアリング事例
	7区11区の商店・企業		輪島KABULETの利用・来訪頻度 輪島KABULETのイベント参加 輪島KABULETとの関わり方
	輪島KABULET利用者 五井建築研究所員	2020/11/5 2021/1/22	佛子園関連施設 (Share金沢) での建築設計的特徴 輪島KABULETの設計段階での 建築設計的特徴
現地 観察・ ヒアリング 調査	巡回調査 同行調査 定点調査	10/3~7 12/8~14	輪島KABULETの6施設 (食事処・ 共用廊下・拠点2階・高齢者デイ ・ウェルネス・ママカフェ) を 15分ごとに見回り、利用人数と 居場所を記録する。 各福祉サービス (高齢者デイ・ 障がい児放課後等デイ・就労支 援A型・B型) の一日のプログラ ムに同行し、利用施設や活動内 容の時間的変化、交流実態を記 録する 主要動線である前面道路と共用 廊下で、施設開所の10時~21時 での通行人数・交流実態を記録

る事例やそれらを誘発していると思われる空間上の特性について、輪島 KABULET 職員・五井職員・各種サービス利用者・施設周辺の商店へのヒアリング調査を行う。日程と概要を表 1 に示し、具体的な調査内容を以下で説明する。

○巡回調査：平日、週末の二日間で、10 時~21 時の 15 分ごとに輪島 KABULET 各施設 (食事処、共用廊下、拠点 2 階、高齢者デイ、ウェルネス、ママカフェ) を見回り、利用人数、居場所を記録する。^{注1) 注2)}

○同行調査：福祉サービス利用者の一日に同行し、プログラムや施設間移動、交流事例を記録する。

○定点調査：主要動線である前面道路と共用廊下の 2 か所で、10 時~21 時 (屋外時の天候：晴れ) の間における通行人数、交流事例を記録する。

2. 研究対象の概要

2.1 社会福祉法人佛子園の取り組みと「ごちゃまぜ」

本研究の対象プロジェクトである輪島 KABULET を運営する社会福祉法人佛子園は、1960 年に戦災孤児や障がい児を対象とした入所施設を開設して以来、障がい者のグループホームや就労支援の場として様々な施設を石川県内に展開してきた。

そして 2008 年に廃寺活用の依頼を受けた西園寺をきっかけに、障害の有無や年齢を超えた横断的福祉サービスの提供と温泉や食事処を始めとした地域交流拠点を設けることで、共生社会の実現へ取り組んできた。

これら佛子園が行ってきた横断的福祉サービスの提供と地域交流拠点の設置による共生社会の実現に向けた取り組みのキーワードの一つが「ごちゃまぜ」である。本研究では、この「ごちゃまぜ」を「障害や年齢、社会的立場に拘ることなく、誰もが相互に作用しあえる関係性

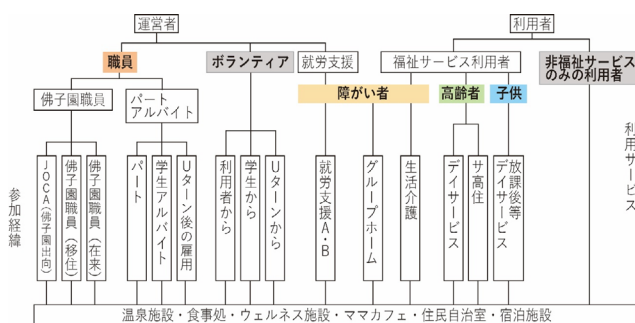


図 1：輪島 KABULET における利用者・運営者属性分類

が作られている状態」とし、「ごちゃまぜ」において作用しあっている主体を輪島 KABULET を敷地とした実態を観察し、それを促すサイクルを考察する。

2.2 輪島市街地における課題

輪島 KABULET が位置する輪島市河井地区は、元々は商店街や朝市で賑わい、漆塗りの工房が数多く存在する輪島市の中心市街地であった。しかし、現在では深刻な少子高齢化に 2007 年の震災被害などが重なり、多くの空き地・空き家が存在する。輪島 KABULET はこれらの空き地・空き家を改修し、横断的な福祉サービスに加え温泉や食事処などの非福祉サービスを提供することで、地域交流拠点としての役割を担っている。

2.3 輪島 KABULET の概要

輪島 KABULET は、2018 年 4 月に通所型の高齢者や障がい児向けのデイサービス・障がい者のグループホーム (以下 GH)、就労支援などの横断的な福祉サービスに加えて、1 階に食事処や温泉、2 階に住民自治室などを設けた拠点施設、福祉サービス利用者と非福祉サービス利用者両方に向けた健康増進を図るフィットネス施設のウェルネス、子供を連れて気軽に滞在できるためのママカフェなどが設けられている。こうした多様な福祉サービスだけでなく、温泉やウェルネスなどの近隣住民が利用するための施設を設けることにより、障害の有無や年齢の幅を超えた福祉サービス利用者同士の交流に加えて、福祉サービス利用者と近隣の福祉サービスを利用しない人々との交流のきっかけとなる施設である。

さらに、輪島 KABULET は佛子園や JOCA から派遣された職員に加えて、輪島在住のパートスタッフやイベント時に利用者や近隣住民が運営スタッフとしてボランティアを行うこともあるように、利用者と運営者が多様な目的や参加経緯、立場をもって施設に存在している。

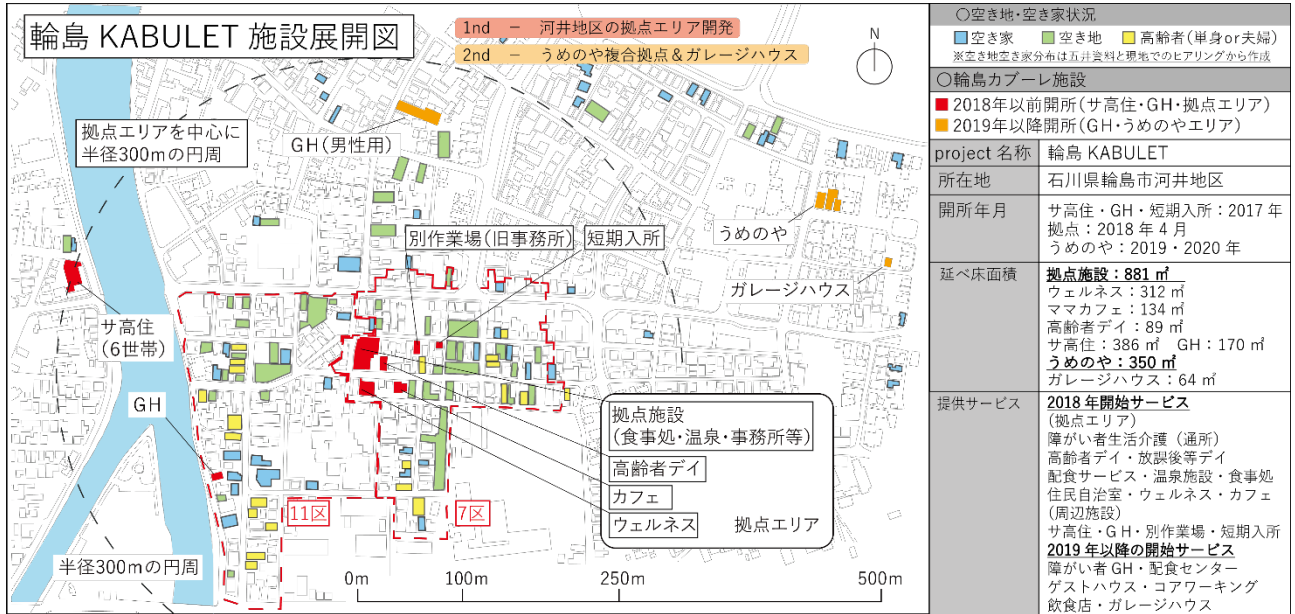


図2：輪島 KABULET 各施設の配置図と概要表

また、図2で表したように、2018年の開所以降、輪島市内に存在する空き地空き家を改修することにより、新たなGHやゲストハウスなどを開設しており、現在も展開中のプロジェクトである。

2.4 輪島 KABULET における施設運営と建築設計の特徴

輪島 KABULET の共存・交流を促すための施設運営の特徴として「多様な利用者・運営者属性の分類」「施設全体が就労支援の場」「複数の施設を利用した福祉プログラム」、建築設計の特徴として「内部空間の透過性」「内外空間の透過性と動線の複層化」「開放的な空間構成と機能よりコミュニティ」「通りとの関係性を重視したデザイン」の各4つが挙げられる。図3で、輪島 KABULET の各施設の平面図へ建築設計の特徴をプロットする。ここから輪島 KABULET の拠点施設では、屋内外の動線空間と隣接する滞留空間において透過性の高い境界部のデザインが為されていることが分かる。

3. 輪島 KABULET における利用・交流事例

3章では、2018年の開所から3年が経過した2020年10月と12月に行った現地での観察調査を踏まえて、輪島 KABULET の拠点エリアにおける職員や

福祉・非福祉両方のサービス利用者、近隣住民の利用と交流事例について分析を行う。

3.1 社会化と社会活動に関して

楨文彦氏は建築デザインのプロセスとして、「空間化、建築化、社会化」を挙げ⁵⁾、特に「社会化」に関して、建築の完成後に建築家を抜きにして、使用者や利用者、そして社会意志を加えて建築と人間が濃密な関係を創り出



図3：輪島 KABULET 各施設の配置図と建築設計の特徴

すことであると述べている。

そこで、本研究では、輪島 KABULET に存在する多様な主体が施設の様々な空間や機能を利用することによって、施設内部での職員などの運営者、サービス利用者、さらに地域との関係性が構築され、次の施設利用へ繋がっていくような、循環する状態を輪島 KABULET における「社会化」と定義する。

また、ヤン・ゲールは屋外活動の三つの型の一つに、他者との偶発的な関わりとしての「社会活動」を挙げている。⁶⁾ 本研究の対象である輪島 KABULET は横断的な福祉サービスに加えて、温泉や食事処、ウェルネスなど福祉サービスを利用しない利用者も同様の施設を利用することが特徴である。このように、利用するサービスのプログラムや参加経緯が異なる利用者間で共存・交流が発生する際の一要素として社会活動における「偶発性」に注目し、同じプログラムで活動していない職員や利用者同士での共存・交流について分析を行う。

これらを踏まえて、3 章では輪島 KABULET における社会的価値を「利用者・運営者・地域間での関係性構築を促すこと」とし、関係性構築のための他者との偶発的な関わり、つまり社会活動を生み出す設計の特徴と設計から 3 年がたつ 2020 年の観察調査で見られた共存・交流事例との関わりについて分析する。

3.2 共存・交流の定義

本研究では、「共存」は複数の属性を持つ利用者や運営者が同一もしくは連続する空間で直接的な交流を持つことなく共に時間を過ごすこととする。それに対し、「交流」は利用者や運営者が挨拶や会話など直接的に関わり合うこととする。

3.3 巡回調査から見る共存・交流の傾向

巡回調査は、2020 年 10/4 (日) と 10/6 (火) の二日間で、10 時～21 時の 15 分ごとに輪島 KABULET 各施設(食事処、共用廊下、拠点 2 階、高齢者デイ、ウェルネス、ママカフェ)を見回り、複数属性の利用者・運営者間での共存・交流事例(2 日で 175 事例)を記録した(表 2)。

巡回調査において発見された 175 事例を、拠点エリアにおける共存・交流を発生経緯の観点から 4 種類に分類する。^{注 3)}

表 2：巡回調査で見られた共存・交流事例

10/4 (日) 調査	食事処	共用廊下	拠点2階	高齢者デイ	ウェルネス	ママカフェ
①同プログラム	32	4	1	8	11	0
②異プログラム	3	1	6	0	2	6
③動線	0	12	0	2	0	0
④内外透過性	0	0	0	0	0	0
10/6 (火) 調査	食事処	共用廊下	拠点2階	高齢者デイ	ウェルネス	ママカフェ
①同プログラム	12	0	1	7	23	4
②異プログラム	4	1	6	1	6	1
③動線	0	12	4	0	0	0
④内外透過性	0	3	0	1	1	0

- ①共通のプログラムを利用することによる共存・交流
 - ②異なるプログラムによってある一つの空間に集められたことによる共存・交流
 - ③動線横の滞留空間に居座る主体とそこを通りがかかる主体間での共存・交流
 - ④複数の内外空間が繋がることで、他者の存在を認識することによる共存・交流
- ここから以下の事が分かる。

- 1) 二日間を通して、食事処とウェルネスにおいて同プログラムでの共存・交流事例が多く見られた。これは、食事やウェルネスのレッスンといった明確な目的があり、かつ人が集まりやすい時間帯がある施設に、複数の属性の利用者・運営者が集まったことが分かる。
- 2) 拠点 2 階やママカフェでは、異なるプログラムの共存・交流事例が比較的多く見られた。拠点 2 階は主に住民自治室として学生の勉強や近隣住民の談笑、就労支援利用の障がい者の休憩場所として使われているため、偶発的な共存・交流が見られた。ママカフェは、現在就労支援 B 型を利用する障がい者の人たちが日中作業する空間として利用しているため、そこに近隣の子連れの子供たちや他サービスの利用者が休憩に来た際に、共存・交流が生まれている。
- 3) 調査した両日で共用廊下において、12 の共存・交流事例が見られた。この共用廊下は、五井へのヒアリング調査でもあるように、輪島 KABULET における建築設計の特徴の一つである「動線部の複層化」によるもので、拠点施設の玄関から温泉施設や食事処、2 階住民自治室など全室へのアクセスに必要な動線となっている。さらに、この動線横に休憩室を設置し、共用廊下、食事処、休憩室の間の壁を一切無くすことによって、廊下を通る人が休憩室や食事処で寛ぐ他の利用者や清掃を行う職員などと顔を合わせやすい設計となっていることで、自然と相席や挨拶を行う場面が見られた。

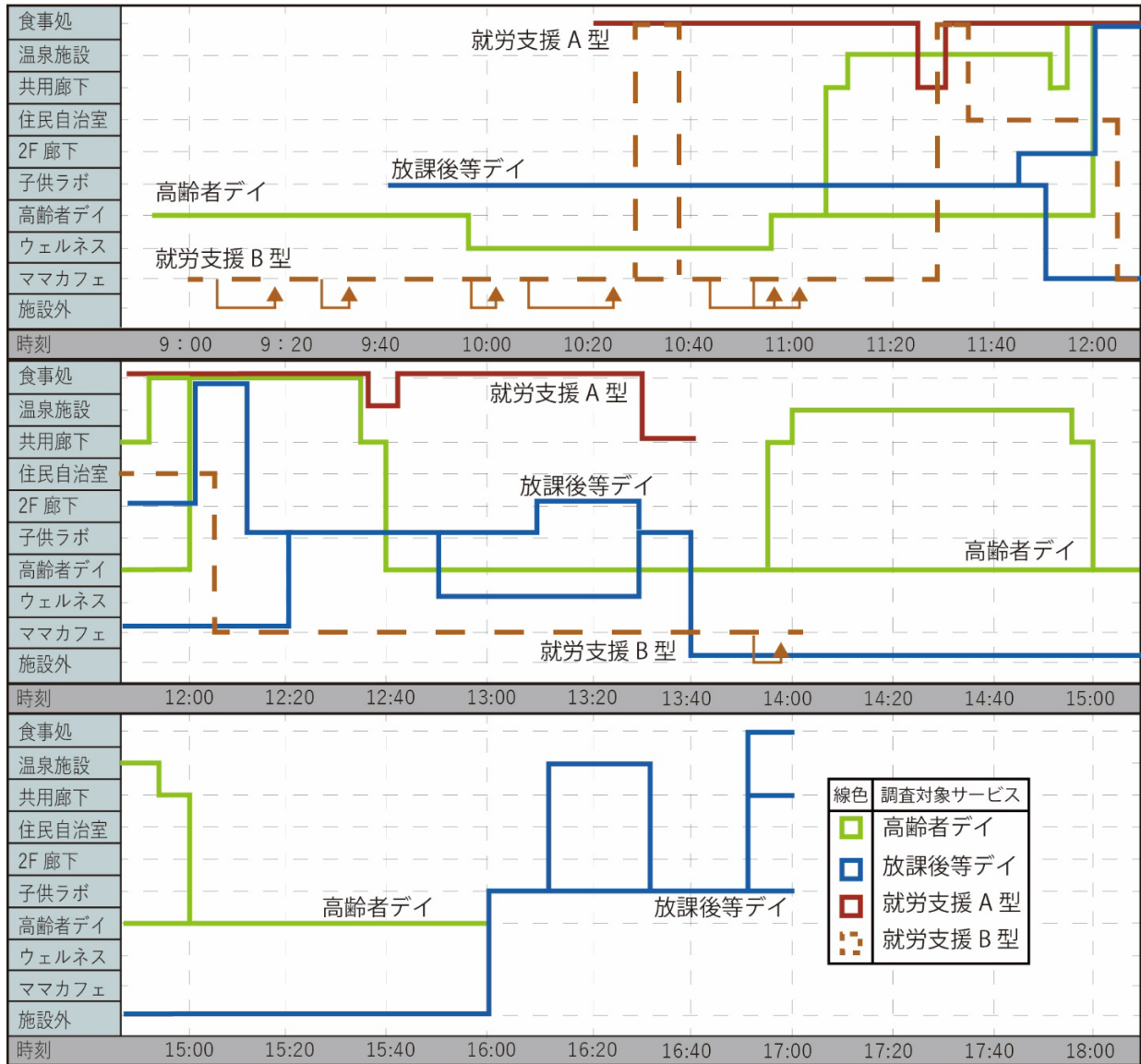


図 4：同行調査による各福祉サービスの時間毎の活動場所の変化

以上より、拠点エリアにおける共存・交流の傾向として、食事処やウェルネスのような同一の目的を持つ施設に複数の属性の利用者・運営者が集まる事例と利用者がそれぞれの目的を持つ中で空間を共有する事例に分けられることが分かった。さらに、拠点施設の共用廊下では、各室への動線が意図的に集中されており、そこに隣接する滞留空間が開放的に設計されていることで共存・交流が促されていることも分かった。

3.4 同行調査から見る共存・交流の傾向

同行調査は、各福祉サービス（高齢者デイ・障がい児放課後等デイ・就労支援 A 型、B 型）利用者における一日のプログラムに密着し、活動時間内での活動施設と活動内容、共存・交流事例を記録した。

図 4 は、各福祉サービスの活動時間毎の活動場所を表している。この図から、高齢者デイ、放課後等デイ、就



図 5：高齢者デイ利用者による食事処への移動経路

労支援 B 型は活動時間内に施設間を移動する回数が多いことが分かる。例えば高齢者デイ利用者は午前中のプログラムとして 10 時に前面道路向かいのウェルネスへ移動し、11 時から各自温泉へ入りに拠点施設へ移動する。12 時には食事処で昼食を食べ、午後は午前温泉に入らなかった人は温泉へ行き、その他の時間は高齢者デイ施設でレクリエーションや別室でのマッサージなどを受けている。

放課後等デイでも、基本活動場所は拠点 2 階のこどもラボであるが、他にも拠点 2 階の廊下や温泉施設、食事処、ウェルネス、ママカフェなど拠点エリアの様々な室で時間を過ごしており、14 時から 16 時においては施設外の児童館で近隣の子供たちと同じ空間で遊ぶ場面も見られた。

今回の同行調査では、就労支援 A 型は食事処で接客業務を行う障がい者に同行し、就労支援 B 型ではママカフェで内職などの軽作業を行う障がい者に同行した。まず、就労支援 B 型の利用者がプログラムとして施設を移動するのは、10 時 30 分の朝礼と食事のために拠点 2 階の住民自治室への移動が基本となるが、作業の成果物を 200 m ほど離れた別の建物に運搬する必要があるため、ママカフェからアプローチを抜けて移動する場面が午前中に何度も見られた。今回同行調査を行った就労 A 型利用者は、食事処での勤務であったため施設間を移動することは見られなかったが、他の職員や福祉サービス利用者、非福祉サービス利用者が食事処に来た際や、共用廊下を歩く際に挨拶を交わす場面が 8 事例見られた。

以上の事から、施設運営の特徴でも述べた、輪島 KABULET の福祉サービスのプログラムの特徴である利用者の施設間移動の実態が明らかとなった。従来の閉鎖的な福祉施設とは異なり、福祉サービス利用者が前面道路を含む拠点エリアの様々な施設を活用して一日を過ごすことにより、他の福祉サービス利用者や非福祉サービス利用者、近隣住民の目に触れやすくしていることが分かる。さらに、建築設計の特徴である動線の複層化や内外空間の透過性によって、移動時に他の利用者との出会いやすい工夫や他の室内からも視認しやすい環境を設けることによって、複数の属性間での共存・交流を促していることが分かった。

3.5 定点調査から見る共存・交流の傾向

定点調査では、輪島 KABULET 拠点エリアの主要動線である拠点施設 1 階の共用廊下と屋外である前面道路での通行者数と共存・交流事例の記録を行った。

まず 10/3 (土) に行った拠点施設 1 階の共用廊下の定点観察調査では一日の通行者数が 218 人、挨拶や会話などの交流が 18 事例見られた。交流事例の内訳として、①共用廊下をお互いに歩く人が挨拶や会話を行う事例。この場合はごく短時間の交流である。②共用廊下を移動する人と休憩所や食事処に滞留する人が挨拶し、交流する事例。これは巡回調査でも述べたように、共用廊下に面する休憩所・食事処の間に壁などを設けずに、三つの室が開放されて繋がっていることで、動線から滞留空間で寛ぐ人が見え、滞留空間から動線を移動する人が見えることで、偶発的な交流に繋がっていることが分かる。

次に、12/9 (水) に行った前面道路の定点観察調査では、一日の通行者数が 691 人 (内施設利用が無い通行人や車は 119 人)、交流事例が 27 事例発見された。

図 6 は 15 分毎の前面道路の通行者数を属性ごとに分類し、上部には 27 つの交流事例における主体の組合せを表した図である。ここから 10 時～14 時の就労支援のプログラムがある時間帯は障がい者の通行者数が多く見られ、30 分ごとに高齢者の通行も多く見られた。高齢者の通行が多く見られるのは、同行調査でも挙げたように、高齢者デイのプログラムとして、午前中はウェルネスや温泉、食事処など高齢者デイ施設以外の施設で活動するからである。また、11:30 に、近隣幼稚園の子供が散歩の途中に立ち寄り、アプローチに流れる小川や広場で遊んだり、保育士の先生と施設を訪れた利用者が会話する場面が見られた。

ここで、前面道路の定点観察を行う中で集中して交流が見られた、ウェルネス縁側で昼食時に滞在する習慣を持つ就労支援 A 型利用の障がい者の事例を分析する。この障がい者は勤務時の 12:00～12:30 前後に図 4 で赤色の点で示した位置で雑誌を読むことが巡回調査と職員へヒアリングにて分かっており、12/9 (水) の定点観察においても、12:15～12:45 に縁側に座る様子が観察された。その際、30 分間での前面道路の通行者数は 57 名、その中でもこの障がい者との交流が 7 事例見られた。

この障がい者が座る縁側は、拠点施設・高齢者デイ・ウェルネス・ママカフェ全ての玄関が接することで、複数の動線が重なる場所ということに加えて、ウェルネスから前面道路に向けて大きなガラス戸が設置されており、食事処や高齢者デイなどの他施設の室内からもガラス戸によって最も視認されやすい空間といえる。さらに、4.2 で記す様に、輪島 KABULET で定期的開催される屋外イベントでは、この前面道路を歩行者天国化し、ウェルネ

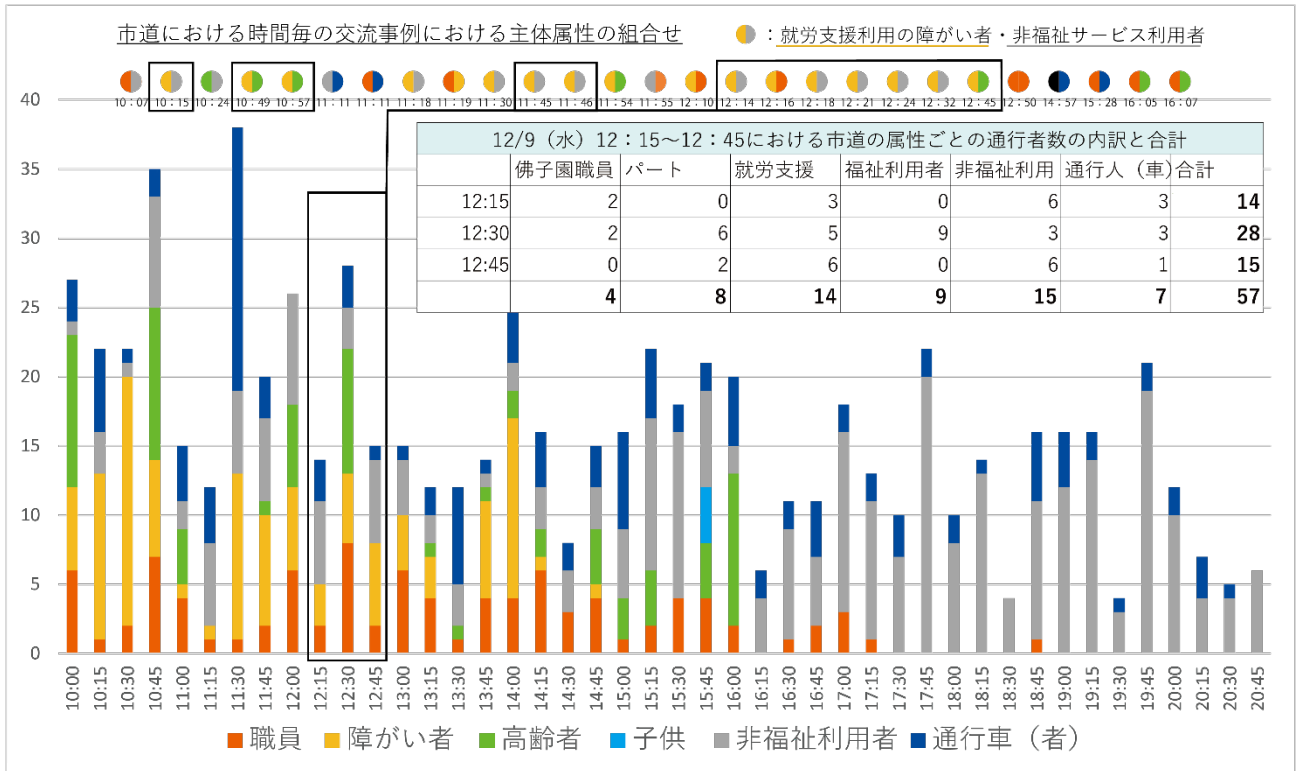


図6：前面道路の通行者数の時間別推移と交流事例の主体の組合せ表

スの一階から縁側をステージとして様々な出し物を行っていたり、施設利用者の日常的な送迎の場所としても利用されている中心的な場所であることも観察調査から分かった。

以上の事から、拠点エリアにおける動線空間には、意図的に利用者や職員が集中することによって移動時の偶発的な出会いや挨拶を促す複層化と、動線部に向けてガラス戸や壁を取り払うことによって視認性を確保することで共存・交流の機会をより多く確保されていることが分かった。

3.6 観察調査のまとめ

このように日常的な施設利用における共存・交流事例と施設運営・建築設計の特徴との関わりを分析したことで、輪島 KABULET 内における利用者・運営者間での関係性の構築は、プログラムや運営者の兼任による施設間移動の促進と建築設計による移動による社会活動を促すための動線・滞留空間・境界部における一体的な空間のデザインが関係していることが分かった。

4. 輪島 KABULET による施設利用者と地域との関係性構築のための取り組み

3章では、輪島 KABULET における日常的な施設利用によって発生する施設内外での共存・交流の事例を分析した。4章では、日常的な福祉プログラムや各種サービ

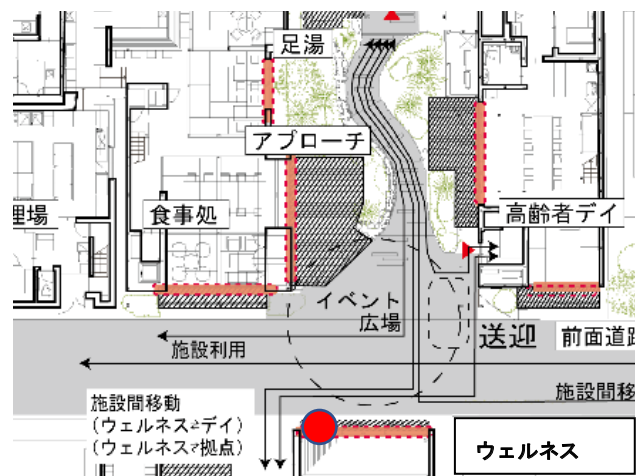


図7：前面道路で休む障がい者の位置と前面道路の動線・役割

スの利用に加えて、各季節間でのイベントや有志によって行われている棚貸での販売、就労支援利用の障がい者による輪島市内への施設外就労を職員へのヒアリングから整理した。これにより、3章で明らかにした日常的な各種サービスに伴う職員や利用者同士での空間の共有以外にも、モノやイベント、人材、就労活動を地域の人々と共有することによる関係性構築の方法について分析する。

4.1 施設内でのモノのシェアリング

輪島 KABULET では、ミシン漆器といった日用品から

季節ごとの飾りなどを利用者から借り受け、他のサービスに活用する場面や、共用廊下で野菜や海鮮加工品、マスクの棚貸といった空間の共有によって、関係性構築と共有が相互に発生していることが職員へのヒアリングから分かった。具体的な内訳としては、拠点施設やウェルネスにおいて公募したものや利用者との会話の中で生まれた貸し借り・棚貸の事例として17件、地元在住のスタッフによる提供物が4件行われてきた。さらに、調査時の2020年には、近隣住民へ次亜塩素酸消毒液を無料で配布したことによって、これまで輪島 KABULET のイベントや GH 新設に良い意見を持っていなかった住民らと関わる機会を設けることができ、その後のイベント等に参加してくれる場面も見られたという。

このことから、輪島 KABULET 内の利用者から職員まで様々な主体がモノや棚などの空間を共有することを通して関係性構築を進め、その関係性がさらに新たなモノや空間の共有を進めていることが分かった。

4.2 イベント開催とボランティアの関与

輪島 KABULET の職員へのヒアリング調査と FACEBOOK による情報発信を整理することによって、2018 年から 2020 年におけるイベント開催の履歴とそこに関わってきたボランティアの実態を調査した。

まず、表 4 で輪島 KABULET 開所時から 2020 年 10 月までのイベント開催の履歴を整理した。主なイベントとしては、毎年 4 月に行われるグランドオープンや周年祭と夏のビアガーデン、秋のハロウィン、冬のクリスマスと各季節に様々なイベントが開催されてきた。これらの中で、表に赤字で記したイベントでは、近隣住民や商店街、周辺の幼稚園・高校・大学などから年齢問わず様々な人がボランティアとして参加していたことが分かった。

表 3：2018 年からの輪島 KABULET で開催したイベント履歴

2018年		2019年		2020年	
		1月	カウントダウン・餅つき大会	1月	
		2月	節分イベント	2月	
		3月	ひな祭り	3月	ピアノライブ
4月	グランドオープン	4月	周年祭・プリ解体ショー	4月	
5月		5月	けん玉教室	5月	
6月		6月		6月	
7月	七夕祭り	7月	七夕・うめのやオープンパーティー	7月	
8月	流しそうめ・ビアガーデン	8月	浴衣でウィーク・流しそうめん・肝試し	8月	流しそうめん
9月	金沢大学フリマ	9月	金沢大学フリマ	9月	
10月	ウクレレコンサート・ハロウィン	10月	ビアガーデン・ハロウィン	10月	ハロウィン
11月	カニ祭り&輪島健康フェス参加	11月	カニ祭り参加	11月	
12月	クリスマス	12月	アイシングクッキー・クリスマス	12月	

表 4：ボランティアが関わってきたイベントの経緯・詳細

開催時期	イベント名称	参加者（参加者紹介）	活動内容	備考
2017年～2019年各年9月開催	金沢大学インターン	金沢大学学生	フリマや写真展などの輪島 KABULET 活用プログラムの提案	
2018.4.18	オープニングセレモニー	まんなか商店街理事	司会	
2018.8月	ビアガーデン	利用者・航空学生	ビアガーデンの作業補助	手伝ってくれた当時の利用者の一人が現在サ高住のパートとして働いている。
2018.12月	大掃除	利用者	大掃除の補助	
2019年1月	餅つき	利用者・航空学生	餅つきの補助（餅つきや準備）	
2019年3月	節分	ウェルネス会員利用者	節分の鬼役	
2019.4.27	一周年祭	航空学生	通行止めの誘導・放課後等デイの子ども見守り・地域商店の出店補助・着ぐるみ・フリマ補助	
2019.8.10	浴衣 De Weekend	興能信用金庫5名	出店補助	航空学生の留学生たちが参加一他の参加者と浴衣を着て楽しんでいった。
2019.10.11	まんなかビアガーデン	航空学園 興能信用金庫6名	出店補助・フリマ補助	
2019.12.25	クリスマス	無料世帯一名	サンタさん	
2020.10.31	ハロウィン	各幼稚園・保育園 地域住民・商店	飾りつけ お菓子配り	輪島 KABULET 近辺の河井保育園・和光幼稚園・海の星幼稚園の子どもと職員が拠点施設の各所に塗り絵や飾りつけを行う
イベント外でのボランティア		参加者（参加者紹介）	活動内容	備考
2018年以降	勉強を教える	航空学生	放課後等デイの子どもたちに勉強を教えたり、見守りなどを行う	夏休み期間に、輪島 KABULET による送迎で実施 当時放課後等デイの人員が不足していたことからお願いし、それ

表 5：就労支援利用者が行ってきた施設外活動

名称	栗拾い	お寺掃除	ぶどう収穫	トイレ掃除	市役所売店
開始時期	2016年	2019年夏季	2019年8月～10月	2020年12月	2021年3月下旬予定
開催頻度	2016年9月～10月 2017年9月～12月	2019年度に7.8回	2018年に一度	毎日	年末年始を除く平日
対象	就労支援 A 型	就労支援 B 型	就労支援 B 型	就労支援 A 型	就労支援 A 型型
場所	松尾栗園 〒928-0215 輪島市 町野町菜蔵二80-10	長光寺 輪島市町野町	穴水の能登ワイン 石川県鳳珠郡穴水町 旭ヶ丘5-1	輪島市マリタウン 内	輪島市役所 〒928-0021 輪島市 二ツ屋町2-29
内容	栗のサイズ仕分け・ 検品・商品加工（栗の 底に切れ目）	お寺の草取りなどの 清掃活動	ブドウ収穫の補助	トイレ掃除	売店の管理・売り子
経緯	職員の人間関係（子供の 関係）から紹介	職員の実家で、職員 を通じて依頼	石川県障害保健福祉課に 施設外就労について問い合わせた ことで、繋いでもらった。	まちづくり輪島と工房 長屋の活用方法に関しての 打合せの際に、就労支援の 話になる。	公募型の入札にて落札
備考	2018年も話があったが、 就労支援利用者の体調不良 によって中止			今後該当トイレ以外の トイレも輪島 KABULET で清掃する可能性あり	

た。

特に、2018年の8月からボランティアとして定期的に参加している航空学園石川の生徒は、元々ウェルネスの利用者であった高校の教員からの相談で、夏休みにボランティア部に所属する留学生たちの活動として放課後等デイの子供たちへ夏休みに勉強を教えることがきっかけとして始まった。その後、イベントへの参加を通して職員や利用者との関係性構築が為されることによって、定期的なボランティア活動や自身のイベント参加などが行われた。

また、施設内でのイベント以外にも、毎年行われているハロウィンイベントでは、放課後等デイを利用する子供たちや職員の子供、近隣の子供たちが輪島 KABULET 関連施設であるサ高住や近隣商店を巡り、お菓子を貰うことなども行っている。

このことから、輪島 KABULET での定期的なイベント開催は、日常的な施設利用者同士がより関係性を深めるだけでなく、非日常的な催しに興味を持つことでこれまで施設を利用してこなかった地域住民や団体が参加するきっかけとなる事や、イベント協力として地域の様々な商店や幼稚園・学校に向向くことで、施設外でも関係性を構築するための役割を担っていることが分かった。

4.3 施設外活動

表5では、これまでに行われてきた就労支援利用の障がい者によって行われた施設外就労を整理する。2016年のプロジェクト開始前から2018年まで輪島市内外の農作物の収穫や清掃活動の補助を行い、2020年からは輪島市内のトイレの清掃活動を開始した。このトイレの清掃活動について、輪島 KABULET 職員と元々清掃業務を委託されていた団体の職員に話を聞くと、施設外の公的な場

所で活動することによって、地域の人びとに存在を認知してもらうことに加えて、従来は複数の団体が場所ごとに請け負っていた業務を輪島 KABULET が就労支援の活動として一手に引き受けることによって、障がい者の活動範囲の拡大とコストカットの両面を意図していることが分かった。この事例以外にも、奥能登において課題とされてきたジムインストラクター不足を解消するために、ウェルネスのスタッフと就労支援A型を利用する障がい者が輪島市内外の様々な施設でレッスンを行っていることが分かった。この活動も、障がい者や輪島 KABULET の認知拡大や地域課題の解決に寄与しているほかに、障害を持つ人々が対人のレッスンを行えることを他の障がい者へ向けて発信ことにより、彼らへのロールモデルになり得ることを目的としていた。

このことから、輪島 KABULET では就労支援の活動として障がい者が施設外で様々な活動を行うことで、これまで閉鎖的な施設内で完結したプログラムで活動することにより社会から分断されてきた障がい者が、地域課題である担い手不足の一つの解決策となると共に、障がいや輪島 KABULET への理解を促す役割を担っていることがわかった。

5. 結論

図8で、これまで分析した日常的な施設利用とモノのシェアリング、イベントとボランティア、施設外活動による施設利用者と運営者、地域との関係性構築のサイクルを表した。

3章の現地観察調査によって、輪島 KABULET 内の多様な属性を持つ利用・運営主体が分散配置された複数の空間や機能を移動しながら活用していることが分かった。さらに、その移動に際して、建築設計の特徴である動線を複層化させることで偶発的に出会う機会をより多く設ける工夫や動線部に接する休憩室や食堂に壁を出来る限り排除し、施設の内外境界部分である扉や窓を大きなガラス戸にすることで、動線での活動をより視認しやすくし、異なる室同士や内部と外部でお互いの存在が確認しやすい環境が作られていることで共存・交流の事例が促されていることも分かった。

さらに、4章では、日常的な施設利用による関係性構築だけでなく、施設内での利用者同士や職員も含んだモノ・空間・イベントを通じたボランティアや施設外就労による地域の課題解決と輪島 KABULET の認知拡大を目指した人材のシェアリングが行われていることが分かった。

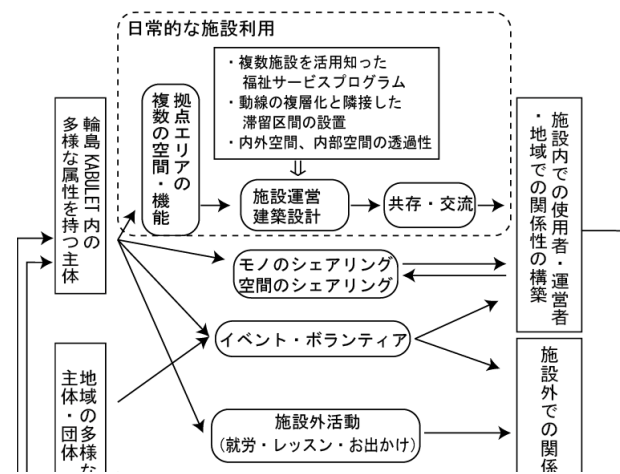


図8：日常的な施設利用とモノ・空間・人材の共有による施設利用者・運営者と地域との関係性構築のサイクル図

この取り組みは、現在施設を利用している人たちの間での関係性構築の循環に、これまで利用してこなかった地域の様々な主体を巻き込むだけでなく、施設に来る以外にも様々な地域との関わり方を生み出していく役割を担っていることが推測される。

このように、複数の属性を持つ主体が共存・交流するために設けられた多様なサービスや空間を利用することに加えて、自身の持つモノや人材としての価値を提供することで、施設内外での利用者・運営者・地域間での関係性構築が進むサイクルが生まれようとしていることが分かった。このように、ただサービスを利用する消費者として施設を訪れるのではなく、知り合いや仲のいい友人に会いに行くことや様々な価値提供を行う中で、輪島 KABULET が利用者や運営者の生活の一部となり、自然と人が集い賑わう循環が生まれることを本研究では「社会化」の一つであると考えます。

今後は、設計者が開所から3年経った現在の利用方法や共存・交流事例を踏まえて、当初の設計段階での想定とどのような差異があるのかを分析することで、西川英治氏の「ごちゃまぜ」設計論の検証を行っていきたいと思う。

謝辞

本研究の調査にあたり、ヒアリング調査にご協力いただいた輪島 KABULET 利用者、職員、五井建築研究所所員の皆様に感謝申し上げます。また、2021年3月に亡くなられた五井建築研究所の故西川英治氏（同代表取締役・会長）には、感謝申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

注釈

注1) 現地調査での事例数の数え方として、同一の人物が重複していたとしてもそれぞれ1事例とカウントする。巡回調査では、各時間で同一の人物が複数の時間で同じ場所に滞在した際も各時間に1事例としてカウントするものとする。同行調査では、輪島 KABULET の提供するサービスごとに一日のプログラム同行調査を行う。その中で、同一プログラム内で利用者それぞれが複数の施設を利用する場合は、可能な限り追跡を行い、移動する利用者の移動中・移動後の施設での利用・交流事例を確認後、もとの同行調査を開始する。定点調査では、同一人物であっても、一度の通行で1人としてカウントする。ただし、車での通過は人数がカウントできないので、一台につき1人とする。

注2) 本文では、施設の名称として現地での職員や利用者が扱うものを参考に、以下の施設名で記述する。食事処、共用廊下、拠点2階は同

一の建物であり、これを「拠点施設」と表現する。その他、拠点施設と敷地内アプローチを挟んだ高齢者通所デイサービスを提供する施設を「高齢者デイ」、道路向かいにあるスタジオやフィットネス器具が設置されている施設を「ウェルネス」、カフェや就労支援の場として利用されている施設を「ママカフェ」

注3) 同プログラムと異プログラムの分け方として、利用者・運営者の属性分類に従ってプログラムを分類した。つまり福祉サービス利用者はその利用福祉サービスを1つの分類として「高齢者（＝高齢者デイ）」「障がい者（＝就労支援）」「子供（＝放課後等デイ）」として1プログラムとカウントし、非福祉サービス利用者は1プログラムと分類する。

参考文献

- 1) 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 「まち・ひと・しごと創生基本方針2019」（令和元年6月21日閣議決定）
- 2) 江文菁, 佃悠, 藤井容子, 岡本和彦, 西出和彦, 富山型デイサービスにおける空間構成と利用者のかかわりに関する研究 地域共生ケアホームに関する研究, No. 675, 987-994 (2012)
- 3) 上野淳, 本野純, 公立小・中学校と地域公共施設の複合化事例における 建築計画と管理・運営の実態 東京都区部についてのケーススタディー, 日本建築学会計画系論文集, No. 493, 117-124 (1997)
- 4) 西川英治, 地域居住福祉施設群の建築設計に関する実践的研究-ごちゃまぜ理念に基づく地域コミュニティ再生プロジェクト Share 金沢・B's 行善寺・輪島カブーレの事例から-神戸大学大学院工学研究科博士論文 (2020)
- 5) 槇文彦, 漂うモダニズム, 左右社 (2013)
- 6) J. ゲール (北原理雄 訳), 建物のあいだのアクティビティ, 鹿島出版会 (2011)